

令和4年度 第2回 堺市スポーツ推進審議会 会議要旨

1. 日 時 令和5年3月23日(木) 午後2時から
2. 場 所 堺市役所 本館12階 第1・2委員会室
3. 出席委員 中西一郎副会長、藤井載子委員、上田勝人委員、西川良平委員、
ト部啓一委員、田中義昭委員、池田義枝委員、清川健一委員、
澤本美奈子委員、西山哲郎委員、池島明子委員、加藤伸一委員、
福尾ひさみ委員、秋元美智代委員
4. 欠席委員 坪内伸司会長、島木伸也委員、清水万理委員
5. 行政側出席者 文化観光局長、スポーツ部長、スポーツ推進課長、
スポーツ施設課長、スポーツ推進課長補佐、スポーツ施設課長補佐、
スポーツ推進課推進係長、スポーツ施設課管理係長、
スポーツ施設課施設係長
6. 傍聴者 0人
7. 案件
 - (1) 堺市スポーツ推進プランの進捗について
 - (2) 堺市スポーツ推進プランにもとづく令和4年度の主要取組について
 - (3) 堺市スポーツ推進プランにもとづく令和5年度の主要取組について

8. 会議内容

事務局より案件（1）から（3）について「案件説明パワーポイント資料」を用いて説明

9. 質疑応答

【西山委員】

堺市スポーツ推進プランの1つ目の目標である「スポーツ・運動習慣者割合（1回30分以上の運動を週2回以上行う者）」が目標値である50%を達成し、その理由として「ながら運動」も含めて調査したことも要因の一つだと報告があった。比較的若い世代や子育て世代に「ながら運動」が適しているという話があり、スポーツ庁も「ながら運動」の普及を進めているところかと思う。この分野の専門家の話によると基本的に「ながら運動」を進めることについては良いことだが、2点注意すべき点がある。1点目は簡単に始められるということは簡単にやめられるということである。「ながら運動」は、掃除しながら、料理しながらというような隙間時間に行うものであるが、行う際に「楽しさ」というものがあるということを喚起する必要がある。また、対象を若い女性とするのであればダンス系の運動も提案していても良いのではという意見があった。2点目は、一人で行う運動なので、間違った動きをすればかえって身体を痛めてしまう恐れがあるというものである。闇雲に身体を動かすのではなく、この運動にどのような効果があるのかなど、身体の使い方（フィジカルリテラシー）をインターネット等でも発信されているので、そういった知識の供与を行う必要があるのではないかという意見があった。

【中西副会長】

簡単にできるということを追求しながら市民が身体を動かす機会を持ち、生活の中楽しく取り入れられるような取組を進めていってほしい。

堺市スポーツ推進プランの令和3年度の進捗についてAからCの3段階評価でA評価がない状況であることは、コロナ禍でスポーツ活動が制限された厳しい状況であったことが要因であると思う。コロナ禍で運動ができなかった、特に子どもたちが最近ようやく昼休みなどに運動場で声をだしながら元気いっぱい活動しているのを見て、日常が戻りつつあることを感じる。B評価としている通り、制限がある中でも取り組めたこともあり、一定の成果があったのではないかと思う。ほかにご意見はあるか。

【池島委員】

堺市スポーツ推進プランの2つ目の目標である「市内体育館等スポーツ施設利用者数」について、コロナ禍により令和3年度の利用者数が減ったという実績がある。もし目標値を見直すのであれば、市の人口動向、年代別あたりの施設利用者割合をそれぞれ目標値として定めるなど具体的にターゲットを絞った目標設定が必要ではないかと思う。理由としては、堺市が市の施設をどういった人に使ってもらいたいと考えて取り組んでいるかという

ことの広報を行う必要性を感じているからである。広報の仕方、媒体の選択も難しくなっている中で、堺市の広報紙も決まった人しか見ず、決まった人だけが施設を使い、活動に参加しているという懸念がある。具体的な目標設定も今後検討してはどうかと思う。

【事務局】

いただいたご意見の通り、施設の利用者数を増やしていく中で利用実態からどのような層に利用してもらうのが良いのかという分析は、大切な観点であると考えます。また、世代ごとにどのような媒体で伝えれば伝わるのかという広報の手法についても工夫が必要と考えています。今後、目標設定と広報の両面についてさらに検討を行う。

【中西副会長】

小学校における子どもの体力の現状はどのようなものかお伺いしたい。

【ト部委員】

小学校でも新型コロナウイルス感染症の影響により外で運動ができなかったこともあり、子どもの体力が下がってきていることを実感している。新スポーツテストでは、評価が高い項目だけでなく低い項目もあるようなアンバランスな結果となっている。学校ではバランスよく体力向上ができないかという考えのもと体育の授業や休み時間における取組を考えている。また、先生の研究グループの中に、身体づくりグループというものがあり、ここでは体育が苦手な子をつくらないために楽しく授業を受けられるような色々な競技を取り入れている。しかし、グループで行っているものになるので、この取組が学校全体に広がっていくことはまだまだ難しいと感じている。引き続き、週に3回ある体育の授業で運動嫌いをなくしていくような取組行っていく。

【加藤委員】

スポーツ推進プランにおける「スポーツ」を堺市としてはどのように捉えているのか。個人競技、団体競技どちらによって健康増進を行うかによって方法も変わると思うが堺市はどのように考えているか。

【事務局】

スポーツというと特に経験がない方にはハードルが高く感じられる。団体競技もスポーツの一つと考えているが、運動習慣者割合を向上させるには、先ほどから話にあった通り個人で気軽にできるウォーキングやサイクリングといった「ながら運動」などもスポーツ・運動と捉え、スポーツに対するハードルを下げて取組を進めたいと考えている。

【中西副会長】

身体を動かすということであれば、何でもスポーツと言えると考え、取り組んでいる方は多いと思う。スポーツというものに分類するのは難しいが、体力の低下を抑えることができる取組で人に胸を張って言えるような取組はスポーツ・運動だといっているのではないかと思う。

大浜だいしんアリーナは開館以来、堺ブレイザーズと連携を行っているが、清川委員何かご意見はあるか。

【清川委員】

令和4年度の主要取組で紹介いただいた「堺ゆかりのトップレベルチームとの連携強化」では、堺市とブレイザーズスポーツクラブは堺市と様々な連携をしてきた。その中でも今年度はプレシーズンマッチが一番インパクトがあったと思う。今後これをどのように広げていけるかが課題であり楽しみでもある。大浜体育館は3,000名が収容可能であり、市の条例で5,000名まで入れてもいい体育館だが、プレシーズンが行われた時は、コロナ禍のため1席空けで実施した。様々な厳しい規制の中で1,000名を無料招待し、チケット購入だけでなく、ふるさと納税も活用して来ていただいた。本来はシーズン開幕前の練習試合のようなものだが、これだけ大きな会場で、これだけの課題をプログラムに盛り込んで行えたことは、単にバレーボールのイベントとしてだけでなく、地域のイベントとしてもやっていけると実感した。担当者はとても苦労されたと思うが、試合相手のパナソニックパンサーズについても趣旨を理解、ご協力いただき、堺ブレイザーズのファンに向けてもファンサービスをしていただくなどとても良い取組だった。この事例をモデルに枚方市でも来年度同様のイベントを行うと聞いている。規制の中でもこれだけのことができたので、5月以降の規制緩和後は3,000名を絶対に入れて実施したいと堺ブレイザーズとしては思っている。また、様々な課題を盛り込んで大きなお祭りとして、バレーボール競技という枠を超えた地域のイベントとしてやっていきたい。また、この事例は、堺市スポーツ推進プランの「基本方針2 堺のスポーツの魅力の創出」の取組として取り上げていただいたが、それだけでなく、ボランティアや、子どものスポーツを行う動機付けなど様々な要素をこのイベントに盛り込めると考えているので、このイベントを活用してもらいたい。

【中西副会長】

調整も大変だが各組織や地域との連携を市が中心となっていけば取組も充実したものになると思う。また、参加者にとっても良い取組だと感じてもらえるのではないかと。

コロナ禍において障害者スポーツも課題があったかと思うが、苦慮されていることがあれば、福尾委員に現状をお聞かせいただきたい。

【福尾委員】

昨年の11月に、4年ぶりに全国障害者スポーツ大会が行われた。各地域から予選会を経て、選手が全国大会に行く中で、堺市では初級から上級までスポーツコーチの資格を81名が持っている。しかし、障害者スポーツ指導員の資格を取得しても、直接選手に指導できるレベルではないという現状もある。指導者の養成をどうしていくのか、興味関心を持ち資格を取得した人の活躍の場の創出などが今後の課題だと思っている。また、様々な障害に合わせて指導者が臨機応変に対処を行う必要があるので、スポーツの指導員というだけでなく障害がある人への接し方なども課題だと考えている。ただ、堺市にはファインプラザや健康福祉プラザなど障害者がスポーツに親しみ、健常者と交流する場があることは非常に良いことだと考えている。

【中西副会長】

令和5年度の新規取組として、「堺市スポーツ推進サポーター制度」について事務局から説明があった。堺市のボランティアの現状を澤本委員にお聞かせいただきたい。

【澤本委員】

ボランティアスポーツ指導者会では、昨年度より障害者のサポートを行った。久しぶりの障害者へのサポートだったが、楽しそうにスポーツをしている参加者の姿を見て、ぜひ今後も続けていきたいと思っている。事務局から説明のあった推進サポーター制度のように、色々な人がボランティアとしてお手伝いできるシステムがあったら良いと思う。個人的な話になるが、学童保育の指導員をしている中で、この3年間運動らしい運動が出来ていない影響で、子どもたちの体力が低下していると感じている。外遊びが出来るようになった現在、外遊びの前にけが防止の体操を毎日やっている。毎日行っているうちに、子どもたちが自発的に準備運動をするようになり、定着させることの大切さを感じた。

【中西副会長】

子どもたちは地域でも家庭でも運動が制限された。大人になった際に必要になる力を伸ばさないといけない期間に運動ができなかったことが、その世代が大きくなったときにどのような影響があるか懸念している。運動が嫌いな子に運動を無理やりさせてしまうことがないように気をつけなくてはならない。遅くなっても良いのでサポートが必要かと思う。皆さまから、色々な意見をいただき取組が回りだすよう、力添えをお願いする。総合型地域スポーツクラブについて、現状の課題などお聞かせいただきたい。

【秋元委員】

総合型地域スポーツクラブも活動が再開し始めたが、新型コロナウイルス感染症の影響による会員数の減少、スタッフの高齢化など課題は山積みである。運動部活動の移行先とし

て総合型地域スポーツクラブに期待が高まっている中で、事務局からの令和 5 年度の「総合型地域スポーツクラブへの支援」の説明では、行政も運動部活動の地域移行に向け、総合型地域スポーツクラブ側の課題整理、受入準備を進めると説明があった。多くの課題がある中で、特に指導者やスタッフなどの人材と活動場所の確保が課題であると認識している。解決するには、人材の面では学校の先生に協力いただく必要があり、場所の面ではこれまで以上に体育館などの場所の確保が必要となる。その際には、行政、学校、地域の 3 者がしっかり互いに連携を取り合うことが大事だと感じている。また、現場として、運動部活動の地域移行の方向性が示されないことが不安である。行政として方向性が定まっていない状況ではあると思うが、少しでもいいので情報共有をお願いしたい。緊密に情報共有をし、一緒に考えていくことが大事だと考えている。子どもがスポーツをできる環境を整えることが一番の目的だと思うので、子どものことを第一に考えて進めてもらいたい。

【中西副会長】

日本スポーツ協会の総合型地域スポーツクラブ登録・認証制度について藤井委員にお聞かせいただきたい。

【藤井委員】

総合型地域スポーツクラブを運営しており、登録は済ませた。まだ明確なメリットは見えないが、運動部活動の地域移行のことを考える中で、国から登録というお墨付きをもらうことで、地域移行の手助けができるのではないかと考えている。今のスポーツ活動は、ボランティアなど様々なものを巻き込まないと難しいのではないかと感じる。自クラブでは、どの教室でも親に見学してもらえるようにしている。そうすることで子どもの成長を見るだけでなく、活動を理解していただき、様々な経験を子供にさせるきっかけにしてもらえると考えている。障害者スポーツについても資格があれば手助けができると思うので出来ることを増やし、協力出来たら良いのではと思う。

【中西副会長】

大阪府では総合型地域スポーツクラブの登録を支援している市町村とそうでない市町村がある。そういった状況でスポーツ少年団は、部活動の支援などを核となって行うようにと言われているが、実際には小学生としか関わっていない状況である。スポーツ少年団としては中学生以降もスポーツ少年団に残ってリーダーとして活動をして欲しいと思うが、小学校で辞める人が多い。そのため、リーダーをどうするかという課題を抱えている状況である。

つづいて、事務局から令和 5 年度の新規取組として「女性参加促進プロジェクト」について説明があったが、現在もスポーツをされているお立場から何かご意見があればお聞かせいただきたい。

【池田委員】

堺卓球協会の状況についてお話させてもらう。女性だけが参加できるレディース大会を年間7回行っている。参加資格は35歳以上になっており、子育てや仕事、介護など様々な家庭事情を抱えながらも卓球が好きだということで活動をしている。276名いる参加者の年齢別の分布を調べると、30代が2名、40代が7名、50代が58名、60代が98名、70代が103名、80代が8名であった。70代が100名を超えたことには驚いている。この結果から見るに、子育て、仕事、介護などを終えて女性が自由に自分の時間を使えるのが50代以降ではあるが、60代以降がスポーツを行えるかどうかは体力の問題があると思う。好きなことをするために、自分なりに日々努力し、無理のない範囲でトレーニングをする目標をもって生活することが大事だと感じる。スポーツを続けるためには、毎日コツコツと身体を動かすことをおすすめする。

【池島委員】

事務局から令和4年度の主要取組の運動部活動の地域移行に向けたイベントの開催について、渋井氏を招いて19校から39人の学生が参加したという説明があった。この講習会に参加した中学生たちが後輩になる小学生に自分が習った楽しさを伝える取組を行うことによって、小学生がその競技に関心を持つきっかけになると思う。女子学生の運動部活動への入部率が下がっているという話も聞くので、そこへのアプローチにもなるのではないかな。また、副会長からもリーダー養成が難しいという話があったが、その観点から考えると、中学生が小学生に教える取組は、中学生の視野が広がるだけでなく、教える楽しさに気づくことができ、教えた小学生が入部することによりやりがいを感じれば、リーダーになっていくのではないかな。それが例えば総合型地域スポーツクラブ内での縦の広がりなどに繋がると思う。このようなイベントを行う際には視点増やすこと、視点を変えることを意識し、波及効果を広げることで、スポーツ・運動習慣の定着につながる仕掛けに繋がるものになるのではないかと感じる。

【加藤委員】

学校の部活動は厳しく勝つことだけを目的にして部活動をしていると耳にする。そのような厳しい部活動内容では子どもたちは入部しない。相手との比較だけでなく自分自身だけの喜びでスポーツが出来るというような考え方がみんなに無ければ運動が苦手な子は運動をしないと思う。また、勝っているうちはいいが負けるとやめてしまうことが多いのではないかな。長くスポーツを行うためには、スポーツが得意でない人が、大人も子どもも自分のペースで楽しむことが出来る環境が出来たらと思う。

【中西副会長】

指導者というのは、後輩に世話し、指導することで自覚的なものを身に付けてもらうの

が理想だと思うが、選手養成になってしまうと試合の勝ち負けがメインになってしまう。スポーツ少年団では、上手い下手ではなく、好きなものを続けていけるような取組をしている。また、スポーツ少年団でリーダーになった子には組織の中でチームのお世話や指導者のお手伝いをすることで、ゆくゆくは指導者として育てて欲しいと考えている。指導者についてはいろいろな形があると思うが、このような場で意見を交換していければと思う。

【上田委員】

私が子供の時は部活動に入部する必要があり、一度入部するとそれをずっと続けたいと
いけない時代だった。部活動に入っていないが、上手な人たちになぜ部活動に入らないかと
聞いたところ、面白くないからという答えが返ってきたことを覚えている。今がどうかはわ
からないが、やはり子ども自身が何がしたいのか拾い上げられるような体制づくりは必要
だと思う。WBC（ワールドベースボールクラシック：野球の世界大会）では栗山監督が大
会開催までに各選手に何のためのWBCなのか話をしたことということが報道されていた。
このように指導者になる人には子どもとのコミュニケーションを大事にし、何のためのス
ポーツかまで伝えて欲しい。その体制については行政にも協力いただきたい。

【西川委員】

堺市はこの10年で様々な特色ある施設の整備を進めてきた。3月5日に少年野球のイ
ベントをくら寿司スタジアムで行ったが、子どもだけでなく家族もたくさん来てくれ、大盛
況だったが、広報が弱かったことが課題と感じた。また、令和4年度の主要取組でも紹介さ
れたが原池公園で行われたスパルタンレースが、賑わいを見せており、今後の可能性を感じ
た。スポーツについて、堺市は伸びしろがあると感じているので広報を頑張ってもらいたい。例
えば野球であれば、整備されていない場所でやるよりも、くら寿司スタジアムのような素晴
らしい場所で試合が出来るだけで子どもたちの夢も広がる。使用料を免除にすると指定管
理者の収益を下げることになってしまうので、助成金なども検討してほしい。新型コロナウ
イルス感染症の影響で、子どもたちの外遊びを見かけなくなったので、引き続き隙間時間で
出来るような運動を市民に対して広げる取り組みを頑張ってもらいたい。

【西山委員】

学校部活動の地域移行の受け皿の形を変えていく必要があるのではないかと考える。例
えばアメリカの少年野球ではレベル別にわかれている。プロをめざすリーグもあれば楽し
むだけのリーグもある。チームも1チーム約12人という少人数で構成されており、チーム
人数を超える場合はチームを新たに増やすなどフレキシブルに対応し、全員が試合に参加
できるようにしている。もっと子どもが参加できるようにするためには、このような工夫し
た受け皿づくりが必要だと思う。また、昔のような指導の在り方も変化が必要ではないか。
皆で考える必要があると思う。

【秋元委員】

西山委員も仰っていたが、楽しく身体を動かし、取り残される子どもが出ないようにすることが大事だと思う。令和5年度の主要取組に「子どものスポーツ可能性発掘事業」をあげているが、個人的に幼児と関わる中で、小学校の子どもたちの運動も大切だが、就学前に身体を動かしているかどうかも重要だと感じている。要望ではないが、新型コロナウイルス感染症の影響で外遊びが出来ず体力が低下している年齢層の低い子どもにも目を向けてもらえたらと思う。

【事務局】

「子どものスポーツ可能性発掘事業」については、詳細を調整段階である。子どものころから運動をする子どもとしない子どもの二極化は小学校高学年から中学校に入った段階から進むと言われているため、委員からも意見があった通り未就学児も含め小学校低学年までを対象に取組を行っていければと考えている。

【中西副会長】

スポーツ少年団の近畿大会が先日あり、そこで15歳の女の子が書いた詩を紹介させてもらい感じたことだが、何事も初めから「えー」と発声して後ろ向きの気持ちから始めるのではなく、「おー！」と発声して前向きな気持ちで取り組むことが大切だと思う。事務局には、本日委員の皆さまにいただいたご意見をそれぞれ活かし、市民のスポーツへの興味関心を高めるための取組を進めてもらいたい。